

調査成果の概要

僧坊跡J-14は、東西約40m、南北約30mの長方形に整地された敷地をもつ僧坊跡です。

調査の結果、丘陵の斜面を大きく削り、その削りとった土砂を斜面下側に盛ることによってこの大きな平坦面が造られたことが確認できました。また、出土した土器などの遺物から、15世紀頃に造られ、約100年間、使われた僧坊であったことも分かりました。

新聞やテレビニュースで報道もされましたが、トイレ遺構や石垣など、全国的にもめずらしい遺構なども見つかっています。

出土遺物で一番多いのは土器類



講師の上原真人さん

で、国産の備前焼、瀬戸美濃焼、土師皿のほか、貿易によって日本に持ち込まれた海外産の陶磁器である「貿易陶磁器」も多量に出土しました。これらの中には、香炉・酒海壺の蓋・盤(大皿)・碗・皿・花生(器)などの青磁、碗・小皿などの白磁、染付け(青花)、朝鮮半島で生産された陶磁器などがあります。

その他にも、短刀・小札・小柄などの「武具」、青磁香炉や青銅製の護摩杓・六器台皿などの「仏具」、天目茶碗・風炉・茶臼などの「茶の湯道具」、火鉢などの「暖房具」、鉄鍋・硯・漆器、砥石・銅銭・鉄鉢・釘や碁石などの生活用具や娯楽用具など、当時の生活を知ることのできる多数の遺物が出土しています。

調査から分かること

これらの遺物から、大山寺僧坊跡に関するたくさん情報が得られました。

15世紀当時の貿易陶磁器の中には、酒海壺と呼ばれるような富や権力を象徴するステータスシンボル(威信財)として、地域の有力者層しか手に入れることのできないものもあります。平安時代末から戦国時代末まで(12世紀末から

16世紀末頃)のおよそ400年間を「中世」といいますが、中世は「商品と都市の時代」と言われるほど、東アジア規模で商品が行き来した時代でした。15世紀当時のこの僧坊に居た僧侶らも、これらを手に入れるほどの経済力を有していたことが分かりました。

また、かつて大山寺には3000人に及ぶ僧侶がいたといわれてきましたが、出土した武具類から、僧坊での僧兵の存在を裏付けることのできる資料を得ることができました。

仏具からは、僧坊施設内で僧侶が日常的に仏道を修めていたことが分かりました。

茶の湯道具からは、15世紀頃に形成された「茶の湯」が、当地でも嗜まれていた様子が分かりました。

このように、今までは数少ない文献資料でしか分から

なかった中世の大山寺僧坊の様子を、具体的に知ることができるよう、貴重な成果を得ました。また、逆に新たな謎も出てくるなど、今後の課題として残ったこともあります。

調査成果の詳細については、今後の広報で項目をおってお知らせしていく予定です。

(社会教育課文化財調査班)



発掘調査の様子 (トイレ遺構の周辺)